



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第65号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Description	事務局：北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2015-06-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73620
Type	journal
File Information	DRFmonthly_65.pdf





月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第65号

No.65 Jun. 2015

【特集1】	DRF新年度体制紹介
【速報】	京都大学、OA方針を採択―担当者直撃インタビュー
【特集2】	アイデアひとつで講習会～講習・研修会開催報告～
【レポート】	COAR-SPARC Conference 2015
【連載】	かたつむりとオープンアクセスの日常

平成27年度 DRF新体制紹介

平成27年度のDRF運営委員・企画ワーキンググループの体制が決定しました！ 各員よりご挨拶申し上げます。

運営委員長挨拶



機関リポジトリを取り巻く環境は、年々変化し、その重要性を増すばかりです。この3月には、内閣府から国としてのオープンアクセス推進に関する基本的な考え方が「我が国におけるオープンサイエンス推進のあり方について」の報告書に盛り込まれたことは、皆様もご存知のことと思います。DRFは、これまで培ったノウハウ・経験を活かし、これらの変化に対応して行く必要があります。また十分対応していけると自負しております。

今後は、昨年度から連携を深めている「機関リポジトリ推進委員会」とより一層綿密に情報共有・協力し、これら変化に対応すべく、機関リポジトリの発展とオープンアクセスの促進のために、皆様とともに努力してまいりたいと考えております。

デジタルリポジトリ連合運営委員長・北海道大学附属図書館長 新田孝彦

平成27年度DRF運営委員一覧 ※●：再任

- | | | |
|-------------------|--------------|------------------|
| ●委員長 新田 孝彦（北海道大学） | ●鈴木 雅子（静岡大学） | ●森 いづみ（お茶の水女子大学） |
| ●内島 秀樹（神戸大学） | ●鈴木 正紀（文教大学） | 高橋 努（広島大学） |
| 杉田 茂樹（千葉大学） | | |

企画ワーキンググループ新主査・副査挨拶



このたび、主査を仰せつかりました。オープンアクセス・オープンサイエンスが重要視される中、機関リポジトリへの期待もますます高まっていると感じます。そんな中でDRFコミュニティとして何ができるのか。地道に活動していく中で、みなさんと一緒に考えていきたいと思ひます。ご協力をよろしくお願いします。

（主査・広島大学 松本）



国内外のオープンアクセスや機関リポジトリをとりまく状況を月刊DRFやDRFメーリングリストなどを通じて情報共有していきたいと考えています。また、日常業務におけるノウハウや疑問点なども共有し、DRFが機関リポジトリ関係者にとって頼りなる存在であるよう活動していきたいと思ひます。

（副査・北海道大学 佐々木）



DRFは、知識や経験の多少によらず、全ての参加機関が等しく、互いに切磋琢磨し合うことのできる、唯一無二のコミュニティだと思っています。「取り巻く状況は様々で、悩むこともあるけれど、でもDRFがあるから大丈夫！」そんなDRFを、みなさまと一緒に作り、支え、盛り上げていければと思ひます。

（副査・鳥取大学 中谷）

平成27年度DRF企画ワーキンググループメンバー一覧

- | | | |
|----------------|-------------------|---------------|
| 主査 松本 侑子（広島大学） | / 副査 佐々木 翼（北海道大学） | 中谷 昇（鳥取大学） |
| 大園 岳雄（香川大学） | 香川 文恵（金沢大学） | 笠井 美由紀（北海道大学） |
| 川村 拓郎（広島大学） | 佐藤 翔（同志社大学） | 塩田 知也（千葉大学） |
| 下村 昌也（神戸大学） | 杉山 智章（静岡大学） | 西園 由依（鹿児島大学） |



今年度からリポジトリ担当となり毎日が勉強の連続ですが、少しでも皆様のお役にたてるよう頑張ります。よろしくお願いします。
(北海道大学 笠井)



新人の身ではありますが、DRFの一員として、楽しみながら活動していきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。
(千葉大学 塩田)



リポジトリについてわからないことがたくさんあります。一緒に勉強させてもらいながら、私もがんばります。
(金沢大学 香川)



リポジトリの経験はありませんが、勉強させていただきながら活動していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。
(神戸大学 下村)

DRFアドバイザー 逸村先生より、「これからのDRFに期待すること」としてコメントを頂きました！



学術情報資源のデジタル化とオープン化が進み、研究者あるいは研究機関の学術生産が問われる時代になっています。URA制度も徐々に根付きつつあります。大学を取り巻く環境はいよいよ厳しくなっています。とすると孤立しがちな大学業務の中で、DRFは機関リポジトリに関わる人材をネットワーク化し、国内外に多様な活動を展開してきました。これは稀有な存在であると言えます。国内外でのいっそうの活躍を期待したいものです。
(筑波大学 逸村 裕)

速報！

京都大学、オープンアクセス方針を採択

平成27年5月7日付で通知された、京都大学におけるオープンアクセス方針の採択。その内容や採択の背景など、気になるポイントについて、担当者へ直撃インタビューを敢行しました！

Q 今回採択されたオープンアクセス方針の趣旨と、特にポイントとなる点を教えてください

—「京都大学オープンアクセス方針」は、京都大学の教員が執筆した学術論文等の研究成果を、「京都大学学術情報リポジトリKURENAI」によりインターネット上で原則公開することを、教員の義務とするものです。これまでもKURENAIへの論文登録は任意ながらも積極的に進めてきましたが、今回、全学の取り組みとしてオープンアクセス方針が承認されたことは、大きな転換点になると考えています。

オープンアクセス方針採択以降、実施前の現時点で既に任意登録が増加しており、教員の関心が高まっているのを実感しています。「論文を執筆したらKURENAIに登録するのが当然のこと」と思っただけのように、今後も引き続き周知や啓発に努めてまいります。

Q オープンアクセス方針採択までの経緯を教えてください

—2014年4月、引原図書館機構長のイニシアティブによりオープンアクセス方針の検討を開始し

した。まずは事務部内に検討プロジェクトを立ち上げ、海外事例を調査し、それを元に方針のたたき台を作成しました。2014年6月から図書館機構内の特別委員会で審議を重ね、2015年2月20日、図書館機構の最高会議である図書館協議会で方針案が承認されました。さらに関連する全学会議でも承認を得、最終的に役員会の承認を受けて正式に成立したのが2015年4月28日です。

現在、実施上の詳細を詰め、登録用データ提出や適用除外申請等のためのシステム構築を進めているところで、今年度中に実施開始の予定です。

Q オープンサイエンスの動きもありますが、貴学における今後の展望がありましたら教えてください

—オープンサイエンスについては、学術情報の流通促進のためだけでなく、研究公正推進の面からも、学内の研究協力や情報基盤整備を担当する部署で関心が高まっており、研究データのリポジトリシステム、学内用のデータアーカイブシステムの充実等、関連する取り組みの検討が始まっています。今後、図書館でも学内関係部署と積極的に情報を共有し、機動的に連携できるようにしていきたいと考えています。

(回答：京都大学 大村氏)



アイデアひとつで講習会

～講習・研修会開催報告～



IR・OAについて、大規模なイベント以外にも、各機関で様々な取り組みが実施されていること、ご存知ですか？

今回は、3月に開催された2機関の講習会について、主催側の裏話も交えつつご紹介します！

広島大学:

機関リポジトリ担当者のためのDOI講習会

○講習会表話ー概要・内容

機関リポジトリ担当者がDOIやその付与について必要な知識を身につけること、DOIの可能性について考えていく動機づけをすることを目的に、平成27年3月9日(月) 広島大学図書館主催「機関リポジトリ担当者のためのDOI講習会」を行いました。講習会は二部構成で行いました。第一部では、杉山智章氏（静岡大学附属図書館）よりDOIについてご説明いただきました。第二部では、第一部の終わりに参加者に書いていただいた疑問を元に、討議を行いました。

第一部の中ではDOIの概要や機関リポジトリのコンテンツへの付与についてご説明いただいたほか、今後を考える上では書籍JANコードとDOIと類似した点もあること、書籍JANコードが書籍流通に大きな役割を果たしていることが、参考になるのではないかという話がありました。学術情報に関連する便利なサービスを支える基盤の一つとして活用されていく、言い換えると、今後DOIを利用したサービスがさらに広く展開されていくのではないかということでした。さらに、静岡大学は機関リポジトリのコンテンツへのDOI先行付与に参加されていたことから、その事例報告を行っていただきました。

第二部では、DOIについての基礎的な部分の確認や「同一のコンテンツ」の考え方、付番方法、遡及などの実際の付与を想定した疑問など多くの話題が上がりました。機関リポジトリのコンテンツへの付与は始まったばかりであり、これから事例を積み重ねていく中で良い方法が見えてくるという側面もあるだろうといった発言があったことが印象的でした。機関リポジトリに新たに加えられたDOIという基盤を、十分にメリットとして活用できるようにこれから皆で創っていく、今はそのような段階である、とまとめられ講習会は終了しました。

○講習会裏話ー工夫したこと苦労したこと

本講習会のきっかけは本学や広島県大学共同リポジトリの担当者から「DOIというものが近々付与できるようになると聞いているけど、よくわからない」という話を耳にしたことでした。「じゃあ、勉強会のような事やるなら興味ある？」と尋ねてみた所、好感触を得たため、開催する運びとなりました。その際、この話題はどの機関でも検討する必要があるものであり参加の入口を狭くする理由はないのではないかということとなり、中国四国地区の大学へ案内を出すことになりました。結果として、中国四国地区から約40名の参加がありました。「NIIやJALCの方を招いての説明会」ではないため“その場で答えがでる”といった性質のものではなく、参加者からどのような反応があるかは不安でしたが、おおよそご満足いただけたようで安堵しています。

最後に少し余談とはなりますが、機関リポジトリという考え方に目新しさはなくなり、それだけで人を惹きつけることは難しくなってきたのではないかと感じています。このような時だからこそ、担当者がつながり機関リポジトリについて考える機会が必要であると思っています。皆様の機関でも、ぜひ講習会や勉強会などを行ってみてはいかがでしょうか。



寄稿：川村 拓郎氏（広島大学）

【講習会概要】

「機関リポジトリ担当者のためのDOI講習会」

日程：平成27年3月9日

場所：広島大学図書館 中央図書館

対象：中国・四国地区大学等図書館職員

主催：広島大学図書館

京都大学：論文がアクセプトされたら知っておきたいオープンアクセス

○講習会表話ー概要・内容

京都大学医学図書館では2015年3月25～27日に、研究者向けのオープンアクセス講習会「論文がアクセプトされたら知っておきたいオープンアクセス」を開催しました。講師を担当したのは、本稿を執筆した八木澤です。1回20分で、3日間にわたり1日2回（12:10～12:30 | 18:10～18:30）同じ内容を計6回開催しました。参加者は累計58名、1回あたりの平均参加者数は約10名（最低6名、最高16名）でした。終了後、参加者にメールでアンケートを依頼しました。

大学に所属する研究者の大半にとって「オープンアクセス（以下OA）」や「機関リポジトリ（以下リポジトリ）」などは、いまだなじみの薄い概念です。しかし、研究者がOAに対応する必要性は日ごと着実に増えています（たとえば、OAジャーナルに投稿して論文投稿料（APC）の支払手続をとる、博士論文のリポジトリ公開のためにジャーナルの著作権ポリシーを確認するなど）。OAとは何か、論文をOAにするメリット、APCの割引情報、リポジトリの登録手順およびサポート組織としての図書館について、研究者に認識してもらうためにこの講習会を企画しました。講習会で使用・配布したスライド[1]は、当館ウェブサイトで公開しています。



○講習会裏話ー工夫したこと苦労したこと

メインターゲットに想定していた医学部の教員は非常に多忙です。そのため、授業時間帯を避け、開催回数を増やし、1回の時間を可能な限りコンパクトにしました。また、予約不要・入退場自由とし、その場で名刺を提出するか、名簿に記入すれば参加可能としました。一方で講習会の対象は教員に限定せず、研究者を目指す学生なども参加できるように「本学研究者」という枠組で設定しました。また、タイトルを「論文がアクセプトされたら知っておきたい～」と銘打ち、実際に論文を執筆・投稿している人向けとわかるようにしました。

口頭やメールでの質問、アンケートの回答などから伺えたのは、博士論文の登録方法・登録の注

意点などに、関心が高いことでした。博論執筆中の方が数名見受けられましたが、OAに関心があるというよりは「博論はリポジトリ登録が原則義務だから」自分の博論を登録するときの注意を知りたいようでした。また、「リポジトリに登録した論文はPubMedからどうやってアクセスできるのか」というアクセス可能性に関する質問も複数寄せられました。PubMedからは、リンクリゾルバ（本学ではProQuest 360 Linkを採用）を経由して、JAIROを検索すると発見できると案内しました。ただ、やはり何度もクリックしなければ本文にたどり着けないという心理的障壁は大きいと思われます。リポジトリに登録があれば、リゾルバをクリックしたときに本文リンクがすぐ出てくるように改修できればよいのではないかと案内中に思いました。また教員や学生だけでなく図書系職員の参加が多く、図書館員のあいだでもOAの理解度に不安を持っている人が多いことが伺えました。

反省点としては、期待していたよりメインターゲット層の参加者数が伸びなかったことです。広報や講習の内容は「いかに研究者にOAを自分の問題として捉えてもらうか」を念頭におきましたが、それでも当事者意識はまだ一部で醸成されているに過ぎないということがわかりました。しかしおりしも、本稿執筆中の2015年4月28日「京都大学オープンアクセス方針」が採択されました。本学研究者にとって今後ますますOAへの理解が必須になってくる中、論文を生み出す研究者にOAについて適切にアドバイスできるよう、図書館から今後も情報発信が必要だと感じました。

[1] http://www.lib.med.kyoto-u.ac.jp/ejpage/doc/20150325-27_oa.pdf

寄稿：八木澤 ちひろ氏（京都大学）

【講習会概要】

「論文がアクセプトされたら知っておきたい
オープンアクセス」

日程：平成27年3月25～27日

場所：京都大学医学図書館

対象：京都大学に所属する研究者

主催：京都大学医学図書館

いかがだったかな？ 「自分の機関でもできそう」と思えたらしめたものじゃ！ 次はみんなの報告が紹介できると期待しておるぞ。



A simple idea from the librarian's mind can build open access!

COAR-SPARC Conference 2015 参加レポート

【概要】

COAR-SPARC Conference 2015に機関リポジトリ推進委員会の国際WGから、三角と西園が参加しました。この国際会議は、オープンアクセスリポジトリ連合（COAR）の年次総会に米国SPARCがジョイントした合同会議の形で開催され、ヨーロッパや北米のみでなく南米、アフリカ、アジアといった世界各地から、図書館・助成団体関係者、研究者など約90名の参加がありました。14日午後の合同ワークショップでは、研究データ管理（RDM）等に対応するための、図書館員の



会場のポルト大学



ワークショップ

スキルアップのトレーニングツール紹介など、オープンサイエンス推進にどう取り組むかが議論されました。その中で、スキルギャップを埋めるためには、諸ステイクホルダーとのコラボレーションが必要だとの意見が出ていました。

15～16日には、4つのセッションが設けられ、オープンサイエンスポリシーの現況やその有効性、RDMサービスのさまざまなモデル、オープンアクセス推進の動きをグローバルに連携させていく必要性、altmetricsを始めとした様々な評価指標等について議論されました。

【感想】

- RDMに関するセッションでは、カナダからユーザ視点に立ったサービス提供を目指した開発体制、南アフリカ共和国から英国・DCCやドイツの大学と連携したRDMサービス立ち上げ、エストニアから非常に短期間でのRDMサービス立ち上げについて、それぞれ事例報告がありました。世界各地でオープンサイエンス推進の動きが様々なモデルで着実に進んでおり、協調しながらこの動きを加速させていく必要性をあらためて感じました。（西園）

- 昨年もCOARのカンファレンスに参加しましたが、この一年でオープンサイエンスのムーブメントが世界中に大きく広がったように感じました。クロージングの基調講演でこれからのリポジトリの役割について、「出版」「研究評価」「オープンサイエンス」の基礎となることが提唱されましたが、日本でも同様かと思っています。この動きに、日本も積極的に連携・協力していかなければ！と、あらためて思いました。（三角）



カンファレンスディナー

【参考】

- 1) 公式ページ。講演のスライド資料も公開されています。
<https://www.coar-repositories.org/community/events/annual-meeting-2015/>
- 2) 機関リポジトリ推進委員会に提出した報告書。
 - － ニュース：https://ir-suishin.repo.nii.ac.jp/?page_id=31#_href_168
 - － 報告書：<http://id.nii.ac.jp/1280/00000107/>

寄稿： 三角太郎氏（千葉大学）、西園由依氏（鹿児島大学）



前回の連載記事執筆時点から今日まで、OA界隈も色々となんだ動きが出てきました。内閣府による「我が国におけるオープンサイエンス推進のあり方について」[1]公表にはじまり、科学研究費補助金でも成果報告時に査読論文等をOAにしたかどうかをチェックされるようになりました。そうした国内でのOA追い風がある一方で、Elsevierがエンバーゴ期間中は著者最終稿でも機関リポジトリで公開できない新たなセルフアーカイビング方針を定める等[2]、リポジトリでの成果公開を妨げる動きも出てきています。しかしこれも考えようによっては、OA義務化方針を定める機関が増え、グリーンOAが出版者のビジネスモデルを脅かす、という事態が真実味を帯びてきたことの証と言えるかも知れません。

とまあ、色々動きはあるのですが、日本国内で一番気になる動きは京都大学がオープンアクセス方針[3]を発表したことでしょう。今月号では既に京大の皆さんによる記事も掲載されていますが、大事なことなので1号で2回取り上げても問題ないでしょう。

素晴らしい点は様々にありますが、個人的に「お、これは!」と思ったのは第5項、「電子データの提出とリポジトリへの登録」に書かれた次の一文です。

「5. 研究成果の発行版がリポジトリでも公開可能である場合、京都大学は当該発行版をリポジトリに登録することができる」

第2項（リポジトリ公開の主体は京都大学）、第3項（適用例外の対象になるのはオプトアウト時）とあわせて考えれば、「発行版（いわゆる出版者版）のリポジトリ公開が認められている場合には、いちいち研究者にファイル提出してもらったり研究者が自発的に申し出て来なくても、機械的に出版者版を登録しちゃうよ」ということだと

考えられます。これをやってOKとしてしまえば、かなりの論文がリポジトリでも公開できるようになります。

「出版者版を公開OKのところなんてそんなにないだろ」と思うかも知れませんが、これが結構あるんです。例えばSCPJデータベース[4]で日本国内の学協会のポリシーを調べてみると、OAポリシーがBlue（査読後の論文のみ機関リポジトリで公開可）である学協会838団体のうち、実に77%（645団体）が出版者版のリポジトリ公開を認めています（細かくは学協会内でも雑誌によって方針は違います）。少なくとも国内学協会の論文は、大半が出版者版を使ってしまう、というわけです。

もちろんその中にはJ-STAGE等で既に無料で論文を公開しているところも多く含まれていますが、複数のソースから論文が公開されていることで、論文のビジビリティが高まり、その結果、被引用数が伸びたりするという研究もあります。ただでさえ雑多な業務に追われる研究者の負担を軽減する意味でも、このOA方針の方式は素晴らしいものであり、是非今後、OA方針を制定しようという大学にも参考にして欲しいと思います。

- [1] http://www8.cao.go.jp/cstp/sonota/openscience/150330_openscience_1.pdf
- [2] <http://current.ndl.go.jp/node/28452>
- [3] http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/content0/index.php?content_id=92
- [4] <http://scpj.tulips.tsukuba.ac.jp/index/>

佐藤 翔

同志社大学

免許資格課程センター助教。

ブログ「かたつむりは電子図書館の夢をみるか」

（<http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/>）管理人。



■次号予告■

- OpenRepositories2015レポート
- 学術情報基盤オープンフォーラム参加レポート
- 連載：今そこにあるオープンアクセス

■編集後記■

半分が新加入という今年度の企画WG。気持ちも新たに、今年度も月刊DRFをよろしくお願いします！（松谷）

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。

✉ gekkandrf@gmail.com

読者アンケートにご協力ください。

http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html



Facebook

<http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>